
A Drowned Body

大橋 秀人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A D r o w n e d B o d y

【Nコード】

N 3 0 6 5 Y

【作者名】

大橋 秀人

【あらすじ】

複数の名前を持ち、複数の男と関係を持っている女性。ある日、当の昔に捨て去ったはずの本当の名前を呼ぶ一通のメールが送られてきた。【毎週土日更新予定】

A Drowned Body 1

1

昔から、フルーツポンチが好きだった。

サイダーに浸かった色とりどりのフルーツ。

炭酸が染み込んだ果肉を口に含んだ瞬間の、あの痛いくらいの爽快
感。

ミカン、メロン、マスカットにピーチ。

とりわけ私はチェリーが好きだった――。

【秋穂？】

携帯電話のディスプレイに私の名前が映し出される。

私はその名前を知っている数少ない人間の顔を思い浮かべる。

茎を摘まんで熟したアメリカンチェリーを頬張ると、予想に反して
甘酸っぱい味がした。

昔、サイダーに浸けられていたそれは、今、シャンパンの味が染み
込んでいる。

「それ、好きだね」

シャワーから上がった渡部は髪をバスタオルで拭きながら、ベッドの縁に腰掛ける。

私はその綺麗な小麦色をした上半身を眺めながら微笑みを返す。

背中の筋肉が隆起して、ホテルの少し暗めの照明に当てられ光沢を得ている。

「チェリー、そんなにおいしい？」

いたるところにキスをしながら渡部はそんなことを聞いてくる。

腰、背中、腕、胸、首筋、耳、頬。

私はくすぐったいキスに笑いながら舌を出す。

その上に、固結びされたチェリーの茎を乗せて。

「へえ、チカにこんな特技、あったんだ」

渡部は私から視線を逸らさず、

「口の中でヘタを結べる人は、キスが巧いんだってね」

そう言いながら茎を摘まんで綺麗な灰皿の上に載せた。

「試してみる？」

私は挑戦的な目を向ける。

彼は一瞬、微笑んだ後、荒々しく私の唇を貪りはじめた。

A D r o w n e d B o d y 2

※※※※※※※※※※※※※※※※

思い切りセックスしたら喉が渴いて、気の抜けたシャンパンを一口に飲み干した。

【秋穂だろ？ オレだよ、純也】

ソファに座り携帯電話を開くと、またメールが届いていた。

渡部の去った部屋は静かだ。

窓に雨粒が滴っているが、音はしない。

その気配だけが感じられる。

眼下では夜の街の灯かりが滲んでいる。

暖房が効きすぎて、頭がボーっとしている。

無意味なことを考えたい気分だ。

「アキホ…」

メールの文字を口にしてみる。

私の、最初の名前。

「純也」

その名前を最後に呼んだのは、いつだったろうか。

常に前を向いて生きて、だから過去を振り返ることなんてない。

いつも、今が精一杯だから。

でも今日は、雨が私を守ってくれている気がする。

外界の雑音が遮断され、私の好きなものしかない空間。

その中で少しだけ無意味なことを考えてもいいような。

「純也…」

私はもう一度、その人の名前を口にした。

A Drowned Body 3

2

週末の夜の、駅の雑踏。

行き交う人、人、人。

すり抜けながら歩く。

手を引かれていると、幼かったときの記憶が蘇る。

「冬美さん、大丈夫？」

無邪気に微笑む俊君の顔が、一瞬、純也のそれと重なる。

【秋穂なら返事をくれないか】

今日もメッセージが届いた。

純也からのメールは、あれからポツポツ届くようになっていた。

私はそれが日に何度も届くようになるのを恐れていた。

でも、それは杞憂だった。

彼からのメールは忘れた頃に届く程度で、私はそれを特に煩わしく

感じずにいられた。

「ここを抜ければ静かなところにでるからね」

優しい俊君は、雑踏を嫌う私を庇いながら歩く。

骨張ったとても大きな手は、私に少しでも安心して与えてくれる。

駅前通りを一本外れると、人通りは疎らになる。

「どこがいい？」

彼はホテルの看板に真剣な眼差しを向ける。

私はその横顔を見て微笑む。

滅多に見られない真剣な顔。

喋らなければいい男。

でも、話すとどこか頭のネジが飛んでいるような男。

私は俊君の、底抜けに明るい性格が好きだ。

いつもヘラヘラして、私の我がままを聞いてくれる。

「ちょっと空いているか見てくるよ」

そう言って彼は行ってしまおう。

私はホテルの門の前で、フラフラとした長身の彼の後姿を見守る。

こんなとき、私は怖くなる。

私は誰なのか。

チカ——。

——冬美さん。

もし、同時に声を掛けられたら、私はどちらに振り向くのだろうか。
渡部がこんな場所に来るはずがないとわかりつつも、そう考えてしまふ。

同じ町に住んでいる。

だから、どこかで出くわしても決して不思議ではない。

そのとき私はどちらに振り向くのか…。

「冬美さん」

戻ってきてても俊君は悩んでいる。

「どうしょっか」

世界で一番、考えることが苦手だという顔をする。

だから私は、笑って彼の手を引く。

「ここに入ろうよ」

A D r o w n e d B o d y 4

※※※※※※※※※※※※※※※※

俊君とのセックスはスポーツだ。

時間が許す限り、何度でも。

終わった後は、気持ちのいい汗をかいている。

急いでシャワーを浴びて、服を着て、清算を済ませ部屋を出る。

外に出たときには、少し息切れしていたりして、それが可笑しい。

きちんとゴールできたような爽快感があって、お互いがお互いの顔を見て笑いあう。

俊君の笑顔は、底抜けに明るい。

きっと、私が笑ってるから一緒に笑ってくれているんだ。

何も考えず。

私はそんな彼を、愛おしく思う。

「今度、いつ会える」

それは惜別の言葉ではない。

駅のホームまで送ってくれた俊君は、純粋な意味でそう聞いているに違いない。

「連絡する」

とだけ私は言う。

彼は引き止めたりしない。

電車がホームに滑り込むと、笑顔でバイバイする。

彼は私に手を振る。

とてもさっぱりとした表情で。

私はそんな彼のことを好ましく思う。

ドアが閉まり再び始動すると、彼はすぐ踵を返した。

【秋穂じゃないのか？】

夜の電車からは街の灯かりが見下ろせる。

移り行く景色。

家とビルと、少しの緑がある街。

渡部がいる。

俊君がいる。

私は一人じゃない。

だから、メールを返信する必要はない。

ないのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3065y/>

A Drowned Body

2011年11月20日21時41分発行